



CONTENTS

- ◆豊田市矢作川研究所創立10周年に寄せて
- ◆豊田市矢作川研究所創立10周年を迎えて
- ◆天然アユ資源保護で成果
- ◆矢作川天然アユ調査会の誕生
- ◆10年目・言わず語らずの話
- ◆住民との共同研究基地
- ◆研究所への期待

URL <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/>

8

2004 August
No.76

豊田市矢作川研究所創立10周年に寄せて

鈴木 公平



平成6年7月、枝下用水土地改良区と矢作川漁業協同組合、そして豊田市の思いがひとつとなり、「豊田市矢作川研究所」が発足しました。一本の川について市民的発想と行動力を生かし、継続的に研究に取り組むという試みは全国にも例を見ないものです。この間、地元から全国の研究者との間にネットワークが広がりました。また、河川管理者である国や県、利水者である電力会社等に側面的なご指導とご協力をいただきました。河畔の草刈や清掃などの河川愛護活動に携わる地元ボランティア団体が多数結成され、自然生態系に配慮した管理を行っています。平成13年からは矢作川「川会議」が開催され、また科学的調査研究を仲立ちとする共通の行動指針づくりが進められています。このような、矢作川を大切にしたいと願う皆さまのご活動に対し、深く感謝申し上げます。

矢作川は、昭和30年代に始まる高度経済成長期に過酷な水質汚濁の歴史を体験しています。そのなかで、矢作川沿岸水質保全対策協議会の「矢作川方式」による水質と開発行為の監視や、西広瀬小学校の生徒たちによる連続1万日を超える水質調査などが行われ、矢作川の名は全国的にも知られるようになりました。このような活動とともに、本研究所がこれからも矢作川を愛する人々の支えとなりますよう、今後とも関係各位のご指導とご支援を心からお願い申し上げます。

(すずき こうへい、豊田市長、豊田市矢作川研究所 前会長)

矢作川研究所 10年のあゆみ

平成6年度	1994. 7	第3セクター方式で設立	平成12年度	2000. 4	旭町森林整備調査開始
	1994. 8	底生生物調査開始		2001. 2	太田川環境調査開始
平成7年度	1995. 4	砂利投入実験開始	平成13年度	2001. 3	第6回シンポジウム開催
	1995. 8	都市ブロック水辺環境調査開始		2001. 5	「矢作川研究 No.5」発行
平成8年度	1996. 3	第1回シンポジウム開催	平成14年度	2001. 8	第1回矢作川川会議開催
	1996. 9	矢作川天然アユ調査会発足		2002. 2	第2回シンポジウム開催
平成9年度	1997. 2	第2回シンポジウム開催		2002. 3	「矢作川研究 No.6」発行
	1997. 3	「矢作川研究 No.1」発行	平成15年度	2002. 4	川を生かしたまちづくりプロジェクト開始
平成10年度	1998. 2	第3回シンポジウム開催		2002. 5	矢作川データベース作成開始
	1998. 3	「矢作川研究 No.2」発行		2003. 2	矢作川学校開校
平成11年度	1998. 4	研究員常勤体制に		2003. 3	第8回シンポジウム開催
	1998. 11	水源林調査開始	平成15年度	2003. 4	「矢作川研究 No.7」発行
	1999. 2	第4回シンポジウム開催		2004. 2	市営に移行
	1999. 3	「矢作川研究 No.3」発行		2004. 3	川と暮らしの記録展開催
	1999. 6	古角プロジェクト開始			第9回シンポジウム開催
	1999. 11	天然アユ保全対策専門委員会発足			「矢作川研究 No.8」発行
	2000. 2	第5回シンポジウム開催			
	2000. 3	「矢作川研究 No.4」発行			

豊田市矢作川研究所創立10周年を迎えて

岩月 寿



豊田市矢作川研究所は矢作川の豊富な水量の維持、水質の保全、住民の生活に潤いとゆとりを与える良好な河川環境をめざし、調査、研究活動を目的として平成6年7月に発足しました。平成9年に河川法の改正があり、河川管理者も今までの治水、利水に加えて環境も視野に入れ、流域住民の声も聞いて河川整備計画の樹立を図ることになりました。

枝下用水は、矢作川から取水を始めておよそ120年、食糧の増産に向けて利用されてきました。この研究所への参画については、「良く使われる川」として知られている矢作川を利用するだけではなく、少しでも昔のように市民が親しめる川に復元したいという思いがありました。

歴史的に見れば、昭和46年には多目的ダムの矢作ダムが完成し、治水面での安全性は非常に高められましたが、水需要の面では、高度経済成長時代に併せて都市用水（上水道、工業用水）の伸び率が大きくなりました。農業用水に関しては、営農形態の変化により水の使い方が変わり、そのため隔年1回位の割合で渇水が発生するような川となりました。一番使用量の多い農業用水は最大65%の節水を実施をして市民生活に支障を与えないようにし、施設面でも用水をオープン水路からパイプラインにして水の有効利用ができるように投資をしているところであります。

20世紀の戦争は石油が原因でしたが、21世紀には水が原因で国際紛争が起きるという報告もあります。研究所の活動を通して、限られた水資源を効率的かつ持続可能な利用ができるように、又、環境にも配慮していきたいと考えておりますので、今後とも皆様のご指導をよろしくお願ひいたします。

(いわつき ひさし、枝下用水土地改良区 理事長)

天然アユ資源保護で成果

新見 幾男



豊田市矢作川研究所は、1994（平成6）年に豊田市・枝下用水土地改良区・矢作川漁業協同組合による第3セクター経営で誕生し、2003（平成15）年4月に豊田市営に変わった。公務員関係法（いわゆる派遣法）の改定により、市職員である研究員の研究所への継続派遣が困難になったため、研究所自体を市営化したものである。

その際に、矢作川研究所の「お役所」化を未然に防ぐ措置として、旧第3セクター構成団体を研究所の「運営協議会」として残したが、やはり「お役所」化は進行し、「研究機能」より「管理」が重要視されるようになった。

豊田市矢作川研究所が挙げた「目に見える」形での最大の成果は、1996年から3年間の矢作川天然アユ調査で「アユ資源保護」の16項目の対策をまとめたことだろう。今年から矢作川漁協がアユ産卵場の造成・保護等の「資源保護」に着手するが、矢作川研究所の科学的な研究成果がなかったら、漁協による「資源保護」の事業化は困難だったと思う。

天然アユ研究の先進地である高知県の西日本科学技術研究所が矢作川のアユ資源保護に共同研究者として参加し、地元に「矢作川天然アユ調査会」という強大な市民ボランティア組織が誕生したことで、矢作川研究所は事業化可能な「16項目」を提案できた。今、中部電力との共同研究で、矢作川研究所の天然アユ研究は研究舞台を三河湾に拡げてきた。

豊田市矢作川研究所は市営化で当面の困難に直面しているが、以上のような「研究財産」のあるうちに、運営協議会と研究員の皆さんのが努力で「市営化」を正常軌道に乗せたいものである。

(にいみ いくお、矢作川漁業協同組合長、週刊ローカル紙「矢作新報」社主、

豊田市矢作川研究所 前事務局長)

矢作川天然アユ調査会の誕生

梅村 鍾二

矢作川研究所が開所した2年後の、平成8年8月に矢作川天然アユ調査会が誕生した。その発端は、平成8年3月に開催された、矢作川研究所主催のシンポジウムであった。当日の基調講演の西日本科学技術研究所生物研究室長（当時）の高橋勇夫氏の「アユは生き残るか—知られざる半生と資源保護—」を聴いて、この会が誕生する運びとなった。講演の内容は、年魚であるアユは川と海を回遊するが、生活史がまだわかっていないこと、産卵期の資源保護が他県と比較して遅れていることの指摘であった。この二つの課題を解決するために、会の結成が呼び掛けられ、15人の応募があった。この15人は職業・年齢はさまざまであるが、共通して



1996年9月17日 アユ調査に向かう調査員
(右から2番目が筆者)

いることは、何よりもアユ釣りや魚捕りが大好きであること、子供時代から矢作川とともに育っていることであった。

顧問の高橋勇夫氏を高知県から迎えて、正式に第1回の天然アユ調査会が開催されたのは、平成8年9月6日であった。初年度の事業計画として、産卵調査と遡上調査の二つが提案された。初秋のこの時期に合わせて、9月16日に葵大橋下で行われた産卵親魚の調査が初仕事になった。目標は雌雄各25尾、計50尾の親アユの捕獲であったが、葵大橋下の刺し網に一網で大漁の350尾もかかり、網が重く運び出せず数人で抱えて引き上げ、調査会も順調にスタートすることができた。現在では四十数名に達し、研究所の実働部隊として活動している。

(うめむら じゅんじ、豊田市矢作川研究所 所長、矢作川天然アユ調査会 前会長)

10年目・言わず語らずの話

田中 蕃



発足10年は、一つの感慨であるが、当初の何もなかった時期のことを、今ここで回顧しても始まるまい。無からの出発で今の姿に変わっているのである。在籍7年間、形をなした段階で、無言だが深い悩みを抱いて、私は研究所を勇退させて頂いた。

市民のための川の研究というのは、聞こえはよいが、それは科学的ではあり得ない側面がある。市民の川を見る目は、意識されているか否かにかかわらず自然主義的である。自然主義は自然科学とは別物だ。それが区別されず混同されている限り、市民に愛される研究所になり得ないのでないか。これに気付いて欲しいのは研究所の職員のみならず、研究所の母胎である市および市職員であり、かつ市民の皆さんである。

川の研究には、幸いにして歴史文化面の課題が取り入れられてきた。それは研究所にとって一つの救いといえるかもしれない。科学的対処では律しきれない市民との接触場面が、ふんだんに経験できたからである。研究という作業によって、研究員は科学的研究業績の蓄積を求める。行政が得たいのは市民への科学的説得材料であり、市民の多くは、そういう手続きで認められた、遊べる川や川辺の充実（もしくはその手段）が欲しいものだ。三者の間には、微妙な隙間がある。

科学的にことを処理しようとする気持ちが先行しすぎ、芸術や宗教を深い内面思考で考究するソフトな脳の養成を、研究員がわがものにしていく鍛錬が必要ではないか。その柔軟さが無いと、研究所全体の社会事象に対する受容量が低下してしまう。常日頃の実証的な科学的作業は不可欠である。しかし、漂う自然の雰囲気を、感覚や思考の世界でふんわりと受け止める器が、研究所に必要なのだ。所員個々への分担割り当ては本末転倒。各個人が努力して器を大きくして欲しい。

(たなか ばん、名城大学農学部 特任教授、豊田市矢作川研究所 研究顧問)

住民との共同研究基地

古川 彰



まだ研究員が田中さん、洲崎さんと白金さんだけだった1998年ごろ、わたしが当時勤めていた中京大学の研究室で研究会をよく開いていました。事務局長の新見さん、事務局の高橋さんなど研究所関係者だけではなく、「矢作川を筏で下る会」の金田さんや中田さんをはじめとしてさまざまな方が集まっていたのはどういう訳だったのか。

それぞれの研究報告のあとは、ビールやワインを飲みながら、研究員が常勤体制になったばかりの研究所の在り方を夜遅くまで議論していました。その後、いくつかのプロジェクトに加わってきましたが、いつもそこには研究所員だけではなく、住民メンバーが参加しており、どうも中心的な役割を果たしているようでもありました。「矢作川天然アユ調査会」もそうですし、最近の成果である「矢作川100年誌資料研究」も川に関わってきた住民の方を交えた「矢作川漁協100年誌研究会」での議論から生まれ出たものです。

もちろん研究所員のプロデュース能力があってのことですが、こうして住民と研究所員が協同して研究を進めるスタイルは、矢作川研究所のような実践指向の研究所にとっては必然的かつ望ましいものであったように思います。

産官学共同研究がもてはやされる現在だからこそ、矢作川研究所が住民とともにつくる新しい学民共同研究スタイルを確立し、発信し続けることができるよう心から願っています。

(ふるかわ あきら、関西学院大学社会学部 教授、豊田市矢作川研究所 研究顧問)

研究所への期待

高橋 勇夫

「川の環境に配慮した」という工法がもてはやされ、全国各地にあふれるほどになった。でも私達は「川がよみがえってきた」と実感できているのだろうか？

少なくとも私は実感できていないし、むしろ心地よいキャッチフレーズを隠れ蓑にした「環境を悪化させる工法」が増えてきたとさえ思っている。さらに暗澹たる思いになるのは、「どこにも悪意が無いのに、実際に悪くなる」という構図ができつつあるように思える点である。そして、このことは川に限らず、環境全体が抱える今日的な問題なのかもしれない。

このようなギャップ—悪意のない悪化—が生まれた背景には、地域の独自性を表現するローカルデータが不足していること、さらにはそれを正確に解釈し、具体的な技術として表現する専門性が欠落していることがあると考えている。はっきり言うと、希望や抽象論では環境は保全できないのである。

豊田市矢作川研究所は、ひょっとしたら我が国で初めての「地域の環境を保全する研究所」となるかもしれない。少なくとも設立目的の一つであったはずだし、その素地は備えている。

設立10年。地域に根ざした研究所としてうまくいっているのだろうか？行政は研究所を有効に活用できているのだろうか？

きわめて先進的であり、実験的でもあるだけにその価値が理解されにくいかもしれない。

「住民の信頼」、これが「理解」の第一歩なのだろう。

(たかはし いさお、天然アユ保全研究会 会長、

豊田市矢作川研究所 共同研究員)

復元—苦難の鮎の道
市矢作川研究所シンポジウム



1996年3月21日 第1回矢作川研究所
シンポジウムで報告を行う筆者

*本号は創立10周年を記念し、研究所の運営に関わってこられた方々にご執筆をお願いしました。（洲）

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028 E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

Rioは再生紙(100%)
を使用しています。